



長谷川均助教授

はせがわ・ひとし 昭和28年、新潟県生まれ。60年、法政大学大学院博士課程を修了。63年、国士舘大学専任講師。平成6年、助教授。「サンゴ礁の環境保全」「地形学」「リモートセンシング」をテーマに研究を進める一方、沖縄・白保のサンゴ礁の保護のために飛び回っている。

一昨年から昨年にかけ、サンゴが大量に死ぬ、ブリーチング（白化）と呼ばれる現象が世界各地で発生、大きなニュースになりました。現在われわれが目にするサンゴ礁は一万年前から、急速に成長、今のような状態になっていますが、いったん死んでしまったサンゴ礁を再びよみがえらせるのは大変なことです。

サンゴは見た目が美しいだけでなく、自然界や人間生活に対して数々の恩恵をもたらしています。たとえば、サンゴ礁は、外敵から幼魚を守り育てる魚礁の役目があります。沖縄などの島々では天然の防波堤です。天然の防波堤がなくなれば、温暖化のためモルディブ諸島や南太平洋の島々で、水没する島も少なくないと思われれます。

▲沖縄とのつきあいは法政大学院生時代から。法政大沖縄文化研究所が久米島の総合調査をしたさい、助手として参加。やがて、三線（さんしん＝沖縄・奄美諸島の弦楽器）を習い、沖縄音楽に傾倒、やがてサンゴ礁の研究に没頭▼

サンゴは環境汚染の程度を知る指標になります。サンゴは、水温が少し上昇するだけで、斃死（へいし）します。サンゴの白化現象は直接的にはエルニーニョによる海水温度の上昇によるものといわれていますが、他にも、農地の無秩序な開発による、赤土の流出なども影響しています。

約七百キロ上空の人工衛星から観測したデータを解析すれば、赤土の流出状況や、サンゴ礁のダメージなどをひと目で、リアルタイムで見ることが出来ます。リモー

## サンゴの海を守る行動派

トセンシングは、このようなサンゴ礁や陸域の変化を知るのに非常に便利です。  
私は、世界自然保護基金（WWF）や環境庁も後援している「コラルネットワーク」の顧問。この組織は香港大学のホジソン教授が提唱、ダイバーを組織して世界中のサンゴ礁の生態調査「リーフチェック」を行うための非政府組織（NGO）です。学者はとかくNGOの活動を軽視しがちでしたが、サンゴ礁の白化現象を初めて世界的な規模で確認したのは、このコラルネットワークなのです。今の時代、NGOのような民間組織の動きが、研究者にとって大切になってきています。



石垣島でサンゴの調査に当たる国士舘大学の学生ら